

# 悪魔と鬼

Der Teufel und “Oni”

支倉幸雄

(1961.9.11)

悪魔——(独) Teufel, (仏) diable, (伊) diavolo, (西) diablo, (羅) diabolus——は新約聖書(ギリシア語の)では diabolos (誹謗者, 誹毀者)と呼ばれ, ラテン語の diabolus はこれに基く。これが Gotisch では diabaulus (au は o の値となっていて, 通俗ラテン語の現われと考えられる)。この語は初期アリウス派キリスト教の幾つかの表現と共に, ゴート, 恐らくは亦ランゴバルドの伝道者を通じて Donau 河沿岸に, 又 Bayern を基点として他のドイツ諸族に知られるようになった。以来時は移り, Lautverschiebung (言語学上, 子母の推移した現象)を経て, 現在の Teufel という形になった。

悪魔は大凡, 俗信的なものと, 教会で考えるものと, 芸術殊に絵画彫刻に表現されるものとに分類することができるが, 最後の部類については, ここでは触れない。

古来あらゆる民族に於て, 人間の力に遙かに優越した超自然的な存在というものが信じられていた。神と云い, 魔と呼ばれるものがこれである。魔については, 教会では信仰に有害な, 神の敵として排撃に努めるが, 俗信の上では必ずしも人間に害をするとは限らず, 用いように依ってはなかなか益を与えてくれるものとされる。

ゲルマン諸族にあっては, 魔(Dämon)は時として神々よりも有力と信じられていた。彼等の神話では Wodan を主神とする Walhalla の体制は,

北方の所謂巨人なる魔に依って震撼させられるし、所謂「神々の黄昏」が来て、遂に巨人族の反攻に潰え去るのである。ゲルマン神話の Wodan 以下の神々も、又ギリシアやローマの神話の神々も、キリスト教の伝道に遭って残らず悪魔や魔女の刻印を捺されることとなった。中世の楽人騎士 Tannhäuser は「魔女」Venus に誘惑されて罪におちるという伝説は、最も顕著な例であろう。

さて教会から見た Teufel は元来神と対立はするが、単に神の敵対者ではない。聖書では Satan として現われることが多いが、ヘブライ語の satan は反対者という程の意味とされ、旧約聖書では「誹謗者」としてではなく、「告発者」、「反対者」として現われる。Balaam（注1）を途上で迎えた天使が実に Satan という名である。ヨブ記の冒頭に於ては、Satan は天主の前に於ける天使の集りで、ヨブに対する天主の批評に反対し、ヨブを非難するものになっているし、天主より Satan に授けられている処分権は、生命を危害する力（即ち疾病）、自然界、及び奪略にまで及ぶものであった。Satan は又全くの反神的態度をとるものとして、ザカリヤ書には、司祭長ヨシュアの密告者として現われ、天主によって却下されている。徹底した、人間の誘惑者としては智書（注2）2の24に明示される。悪への使喚者としての Satan は歴代志上21の1に於て初めて固有名詞として現われ、新約聖書ルカ伝10の18に於て「天国より堕ちた」決定的な神の敵として記されている。多数の Teufel が Satan（又は Luzifer）を首脳として階級社会をなしていると思われている。

悪魔の呼び名として聖書に用いられているものは、Satan や Luzifer の外に Belial, Beelzebub, Azazel, Leviathan 及び (Dämon の名として) Asmodaeus がある。Luzifer については、多くの教父がバビロンの王 Helel（明星 Luzifer）と名づけ、天上の諸星の上に位するとの自負から、

やがてその位より没落することを予言したイザヤ書 14 の 12 を以て悪魔を指すものとし、従って悪魔は亦 Luzifer と呼ばれるわけである。

中世の初めキリスト教が入って古来の神々は挙げて悪魔や魔女として教会から排撃された反面、超自然的な魔力を有する恐ろしい存在であることは依然として変りはなく、Teufel の名をそのまま口にするのはタブーであったので、いろいろ歪曲が加えられた。例えば hd. では deixel, deutsch, dixel, deiker, deutschel, deuker, deuster; nd. では, duker 等。或は又他の表現を以て置換えた。その或るものは所謂隠語に属すると云ってもよい。例えば: der böse Feind, der Böse, der Schwarze, der Daus, der Geier (秃鷹), der Kuckuck (ほととぎす), das Hämmerlein (小槌), Gottseibeius (桑原桑原), dieser und (oder) jener (誰かさん) 等。Teufel 又はその異名或は縁語を基に姓が出来ていることも少なくない。例えば: Höllriegel (地獄の門の意), Hellgreve (即ち Höllengraf, 地獄の太守の意), Helbok, Helvoigt (何れも前者と同様の意), Hellwart (地獄の番人の意) 等。ついでに Faust の中の大立てもの Mephisto (pheles) は恐らくギリシア語で「光を好まぬもの」, 或は「光明を忌むもの」の意味とされ、彼自ら「家ねずみやはつかねずみや蠅や蛙や南京虫やしらみの主」と称している。G.A. Bürger (ドイツの詩人, 1747-1794) や I.G. Müller (ドイツの作家, 1743-1783) 以来 Urian というのが Teufel の隠語として用いられるようになった。それは口にするのを憚るような下層の人々(わが国の穢多非人というような)の上に聖者 Urianus の名が用いられるようになってからである。

既に述べたように神の天使に対立する幾多の Teufel の存在することは、聖書についても知り得るところであるが、後の神学では、劫罰に値する大罪から生れる種々特殊な Teufel を考えている。例えば: Geizteufel (貪

慾の鬼，貪慾漢，守銭奴），Hoffahrtsteufel（高慢の鬼，鼻持のならない虚栄心の強い人間），Saufteufel（大酒の鬼，酒呑童子，のんだくれ）等。

悠久の昔天国から追放された Teufel（Satan）は地獄の王として地獄がその本拠である。キリストに聖母マリアがあるように，Teufel には母も又祖母もあって共に地獄に暮していて，妻も子も又兄弟姉妹も，又時には花嫁（Teufelsbraut=Hexe 魔女）もあると考えられている。

悪魔の外形は種々に考えられ，どんな形のものにでもなることができるとされるが，俗信の上ではゲルマン神話の雷神 Donar の性質を移譲しているとされる関係で，昔 Donar の神に捧げられたいけにえの牡牛の足をしているとも信じられている。“Was hinkt der Kerl auf einem Fuß?”（あいつ何だって片足ちんばを引くんだ？——うろんな奴だ。）とか，“Da steckt ein Pferdefuß dahinter.”（馬の足がかくれている。つまり，何かたくらみがあるぞ。）と云ったよう言い方が生れている。山羊に関しては，或る地方の信仰ではそれは悪魔が創造したもの，特にその足は悪性のものだから食べてはいけないとし，そこから悪魔は一名 Meister Geißfueß（山羊足の旦那）とも呼ばれる。又或る地方では，悪魔はよく片足は人間の足，片足は（牡）山羊の足をした緑衣の狩人として現われ，碌でなしの罰当りな人間，又高慢な人間と好んで友となり，好機の至るのを待ってさらって行くと信じられ，又トランプがことのほか好きである。又牡山羊の足をした悪魔は旋風のように若い娘を襲い，この好色的な襲撃を防ぐ唯一の方法は強い臭いのする薬草による以外にはない。悪魔の常用する印章は，牡山羊の足型で，魔女は魔女試験に全部合格し，悪魔とその部下たちとの実際的な親愛関係を許した後に於て，この牡山羊の足型をした印章を十字の上にく黒く灼き付けて貰う。魔女たちが踊り明かした場所には，翌朝山羊の足跡が見られる。又魔女裁判に於ての陳述によれば，悪魔は Junker Hans

又は Schönhans という、りゅうとした貴公子として現われ、贅沢極まる服装をしている。その他悪魔は種々の動物の姿をすることができる。例えば、Faust ではメフィストがむく犬になって最初現われるように。又りすなどの形をして現われることもある。一般に今日何となしに頭の中にも描かれ、絵などにも表現されるあの悪魔のイメージは最初からあのようなものではなく、時代に依ってもいろいろニュアンスがあったようである。その例としては der Wilde Jäger (注3) や Freischütz (注4) なども悪魔の顕現と見られることである。

Teufel は既述の通り地獄に追放され、そこに呪縛されているが、時あって自由になることがあり、“Der Teufel ist los.” (悪魔が自由になった——一大事だ、さあ大変。) となる。そうなると Teufel は暴状至らぬところもなく、“Der Teufel legt den Menschen ein Ei in die Wirtschafft.” (凶事や不和が人々の間に生ずる) し、悪夢のように人間を苦しめ、乗り移り、人間の中に入り込み、人間は悪魔に憑かれる。即ち、その人間は“Er hat den Teufel im Leib.” 又、“Er ist ein eingefleischter Teufel.” (悪魔の化身) であり、少し穏かな表現では、“Er ist ein ver-teufelter Mensch.” (ひどい人間、時には讃嘆の意味で、大した人間) とか、“ein Teufel in Menschengestalt.” (人間の姿をした悪魔、つまり、人の皮着た鬼) とか“Teufelskerl” (悪い奴、又時には讃嘆の意味で、どえらい奴) ともなる。悪魔に乗り移られた人間のことを又“Er ist des Teufels.” (悪性のもの、手のつけられない、良識で扱うことのできないもの) という。ついでに、悪魔を祓うことのできるのは限られた人々で、中でも牧師は常に悪魔と戦う聖職者であり、従って牧師は“Teufelsbanner” (悪魔を祓う人) である。

悪魔は招かずとも勝手に来るが、人間が呼び出すこともある。“Man

darf (braucht) den Teufel nie (nicht) über die Tür (an die Wand) malen, er kommt von selbst ins Haus.” (悪魔を戸口の上〔又は壁〕に画くには及ばない、自分で先方から家に入り込んで来る。) (縁起でもないことを言って〔又は、して〕はいけない、そうでなくとも災厄は見舞い勝ちなものだ。) 又俗信や伝説では、悪魔を呼び出し、これと契約(所謂 Teufelspakt)を結び、悪魔に魂を売り渡す、ということは申すまでもなく、極楽往生をあきらめて地獄行きを選び、最後の審判を受けてまかり間違えば永遠の劫罰を課せられる覚悟をすることである。その代償に悪魔は人間にいろいろの奉仕(乃至は反対給付)をしなければならない。しかし、変幻出没自由自在の神通力を有し、地下の宝物や資源などの在りかを知り、どんなものでも立ちどころに、無から有を生ずる、凡そ科学の理法をあざ笑うような「魔力」を有する悪魔にとっては、極楽浄土に永生して神から至福を授かることを除いた以外の凡百の欲望を人間に叶えてやる位のこと、それこそ児戯に類するわざである。Dr. Faust は申すも更、「魔弾の射手」なども自ら悪魔に魂を売って非願を遂げようとした実例であり、その他童話、伝説に於て悪魔の演ずる役割は大きい。これはキリスト教の純粹に觀念的と云ってもよい無形の「悪」としての Satan は、中世の初めゲルマンに受け入れられるに当り、彼等従来の信仰と或る程度の妥協調和が行われた結果、次第に庶民にも理解できる形のものとなり、同時に古来の神々は新しい教に於ける絶対の神に対しては到底對抗することのできない化け物の一種にまで落ちぶれてしまったこと、それら化け物は、キリスト教の眼からは Teufel であり、庶民から見では力は絶大ながら、根は他愛もないものであったと考え得る理由があり、このような数多くの Teufel は民衆の生活とはなかなか切り離せない関係のある、謂わば庶民に親しみ深いものであったとさえ言い得る、ここに現われる悪魔どもは、身の毛の

よだつような恐ろしいのも絶無ではないが、人間との取引に当っては、せっかく人間のために 富や権力や快樂を与えてやったり、Teufelsbrücke（悪魔の橋、容易にできそうにも思われない難所にかけてある；瑞西ウリ州にその名の橋が現存する）のような至難な事業を達成してやったりした揚げ句には、最後のどだん場になって、人間にうまくしてやられるのが落ちになっている場合が多い。その際人間の常用する手段は、十字を切るとか、お祈りを唱えるとか、要するに一種の「まじない」で、ここでは人間の方が悪魔より一枚上手なのである。つまるところ、童話や伝説では悪魔は“ein dummer, armer Teufel”（間の抜けた衰れな奴）である。

悪魔の名を呪いや罵言に用いることは非常に多い、“in Teufels (Dreiteufels) Namen”（悪魔の名に於て——畜生！ いまいましい）；“Hol dich der Teufel！”（省略した形では：“Daß dich”）（悪魔にさらわれろ、くたばれ、うせやがれ！）；“Hol mich der Teufel！”（悪魔がおれをさらって行け——おれは地獄へ落ちててもかまわぬ）；“Das ist zum Teufelholen.”（そいつはひどい、とんでもない、真っ平だ。）；“Geh (Scher dich) zum Teufel！”（地獄へ行け、くたばってしまえ、うせやがれ！）；“Zum Teufel！”（こん畜生、副詞的には、一体全体、絶対に等）；“Zum Teufel jagen (schicken)”（だしぬけに追放、免職、解雇する）；“Sie ist zum Teufel.”（彼女はもう駄目だ）；“den Teufel (auch)”（とんでもない、真っ平ごめんだ）。

Teufel に関することわざの類は幾千というも過言ではない。前述の“Man darf den Teufel nicht an die Wand malen.”もその一つである。

Teufel は亦植物やその他いろいろの物の名に使われることも多い。例えば Teufelsabbiß（まつむし草）；Teufelszwirn（くこ）、Teufelskralle（してしやじん属）、Teufelskirsche（ベラドンナ）、Teufelsdreck（あぎ）、

Speiteufel（べにたけ）など。又 Sprühteufel は花火の一種（又転化して、いらだたしい気分、短気な人）である。

ここに Teufel に対するサインとも云える呪文などについて少しく述べることにするが、それをはめている人の姿を消す、或は他の人の眼には見えなくする指環、或は指環にはめる石、古くは「隠れ蓑」といった類を欲しがるのは人情の自然であろうし、又ゲルケンの古い信仰でも、神や魔や死者、そして特定の人間、例えば王とか、或る種の特異な女性とかもこの特性を賦与されていた。この重宝な力を、Teufel に乞い求めるということは、魂を売るという交換条件を呑んでも、敢てなされたと信じられているが、その際次のような呪文を唱えることになっていた：「悪魔の主で、又人類の救いのため十字架にかかり給うた神の敵である Luzifer に切にお願いする。父、子、聖霊、そして尊い三位一体にかけて、又われらが主イエス・キリストのみ母にいます処女マリア、又神のすべての聖者、そして最後の審判の日にかけて、何卒この不視の石を探して欲しい。」こうして悪魔と契約関係の出来たものには、勿論悪魔はその望みを叶えてやった。魔女はこんな場合ひき蛙を授かる。又胡栗を与えられることもあった。「主の祈り」を逆に唱えることに依って悪魔から不視の魔力を乞い受けるという手もあったようである。又クリスマスの前夜に十字路に立って円を描くと、悪魔が来るので「隠れ頭巾」を乞い受けることができるともされる。この際その円からは、たとえ悪魔がどんなに誘惑しても、一步も出てはならない、出たらもはや身の破滅である。一般に、あらゆる執拗な悪魔の誘惑を排して、クリスマスの前夜や、大晦日の夜や、御公頭日（一月六日）の前夜に、まんじりともせず目をさまして居れば、それから後は、他人の眼には姿が見えなくなるといわれる。この時悪魔の誘惑を退けるのに効果のあるのは、聖ヨハネ祭（六月二十四日）に尚咲いていた白花



の Elxenbaum という木（不詳）で作った十字架であるとしてある。

呪文を唱えて魔を呼び出したり、また魔を抜ったりすることは、邪教的なわざとしてキリスト教から排斥されたが、しかし多くの場合効果は至って薄く、キリスト教的に呪文を変えたり、キリスト教の祈りや唱えごとに置き換えたりした位が関の山で、甚だしくは、隠密裡に全くもとのままの形で呪法が行われ続けた。呪文と祈りとの間には、両者とも効験の多い唱えごとや文字を用いている点から云って、根本的には格別の相違はない。

クリスマスから御公顕節（一月六日）までの所謂十二夜の頃は、いろいろな魔物の出現横行する時期とされ、それらの災を防ぐためには、この慎しみと沈黙の期間には、咳さえしないようにし、やむを得ない時は、壺か何かの器の中へする程に注意し、子供が騒いでやまない時は、皮ぶくろの中へ入れた。家は煙で燻べ、蹄鉄や十字を戸口にかざり、空砲を射ったり、鞭を鳴らしたりする。家畜に水を吞ますためひき出したあとの畜舎の戸口には斧をすえて置かなくてはならない。これらの処置は皆魔の侵入を防ぐための、謂わば魔除けである。又魔物や魔女或はそれらのしわざとされる病は、妊産婦をねらっていることが多いと考えられ、妊産婦は護符を身に着けたり、産婦の寝床に護符を貼り付けたり結び付けたり、又かよわい嬰兒や抵抗力の弱まっている病人をまもるためにも彼等の寝床に護符を貼ったり結び付けたりする。家や畜舎も同様に魔の侵入を防ぐ目的で、護符又はそれに類するものを貼り付けたり、結び付けたり或は護符と同等の記号や絵や文字を直接にかき付けるか、彫り付ける。

悪魔を呼び出そうとするものは、七日七夜の間身を清浄に保たなければならぬとされ、又呼び出しの準備として三日間の断食が必要とも云われ、又一説には、九日間は祈ってはならぬ、又聖水をいただいてはならぬとさ

れる。このような用意は、魔性のものをまのあたりに見てその考えていることをわが身に受け入れる体勢を整えるのに必要とされるのである。霊や悪魔を扱う術を心得ている者は、牧人、鍛冶屋、皮剥ぎ人、肉屋、産婆、刑吏、百姓などといった一定の職業の者とされ、特に婦人はこの術に長じていると考えられた。又代々この術を相伝する家もあり、一般に牧師はこの術に長じているとされた。更に術者を分類すれば、特殊の魔だけを専門に扱うものと何でもござれのものとなる。中世に於ては、魔に憑かれたのを癒すには、医者よりもむしろ聖職者に依頼した、殊にカトリックの坊さん、中でもカプチン教団の坊さんにはこの秘法の心得があると考えられ、プロテスタントの地方でも、このような心得のある坊さんに頼んだ。時には霊術者に霊媒を使用することがある。霊媒は術者の眼には見えない霊を認めることができる。多くの場合霊媒には、罪を知らない清浄な少年が用いられた。

さて悪魔を呼び出すには一定の補助手段を用いる。或る地方の伝説では、獣脂のろうそくを手持って居り、又或る地方のそれでは、黒色その他のろうそくが用いられることになっている。又或る場合には、どんどん炭火をおこし、参加者が幾人もガスのために窒息し、翌晩お通夜の人々が気絶したのを、ことごとく悪魔のしわざと考えた。この種の補助手段の中で最も重要なものは、ぐりと輪をかくことである。輪は術者に依って呼び出された魔物の力から術者を護るものである。この輪の中へは魔物の力が及ばないことは、実に驚くべき程であるが、時には魔物を輪の中へ閉じ込めて金縛りにすることもある。或る記録では又魔物を、満水したグラスの中へ呼び込んだとしてある（アラビアン・ナイトの中に出て来る、海中から網であげられた壩詰の魔物が想起される）。時には術者は魔法書を手にとって、その中から唱える。又斧や剣を所持することもある。

さて魔を呼び出す仕事の本来の部分は、一定の呪文を唱え、それに附属して或る種の動作をするということに帰する。この場合のやり方は随分いろいろのものがあるようで、その最も普遍的且つ基本的なものは、繰り返すということと、ゆっくり抑揚をつけ吟誦するような唱え方である。呪文そのものは、その一語一語としては何の変哲もなく、全体のシンボルとしてだけ意味があるという場合が多かった。Abrakadabra とか、Sator とかいう呪文がこの例である。しかし時には全然わけの分らない呪文もあったがその珍ぶん漢ぶんが迷信者には有りがた味があった。施術に用いる器具にしても、日常の用には全く何の役に立つかわからないものがあった。殊に呼び出されて来た魔物の名前というものは術者にとって有力な武器であって、この名前を知っている者は、名前の持主である魔自体を支配する力を有することになっている。つまり名は魔の本体を顕わすと見られるからである。一般的に Teufel, Satan と云うような魔物の名は、日常口にすることはタブーであるが、施術に当ってはあからさまに名を唱え、これに依って魔を伏する効験を顕わす。名前でなくとも、魔の性質、氏素性を挙げてやることも魔を捕捉するのに役立つ。呪文の形式は韻文に作られ、節調のあるものであった。韻と節調のこの二要素は、呪文の暗示的、延いては魔術的な力を高める。しかしその後韻文形式は廃れて散文形式となり、歌う呪文は専ら未開人の間に残存する。その代り同じ語又は同じような語群を単調に繰り返すことに依って呪文の力と浸透性を高度に強める暗示的効力を顕わす。

既にとり憑いている魔、或は一旦呼び出した魔を抜い又は追いやるに当っての呪文やそれに付随する動作器物も呼び出しの場合と大同小異である。「月のかけ行く如く、病も衰え行くべし。」或は「月のみつるに反し、病勢は衰え行くべし。」(比喩)；「地獄と地獄の劫火と、地獄の責苦と、及び

これら一切の地獄の支配者とを呼ぶ、直ちにわがこの輪の前に姿を現わせ。」(命令)；「呪われた熱病め、去れ！」(罵倒乃至呪詛)など。聖書の句やキリスト教の祈りの言葉が呪文として唱えられることは抜いの場合に有力であるが、ヨハネの福音で熱病が追放され、主の祈りや、アヴェ・マリアや「深い淵から」(詩篇 130 の初め)や、鎮魂ミサは有効な呪文とされる。又教会の鐘の音や儀式も魔の追い抜いに重要な役割を演ずる。抜いの呪文の形式は、先づ神の名を呼び、結びとして「父なる神と、子と、聖霊のみ名においてで終ることが多い。キリストの罪なくして流された血、聖なる五つの傷、聖なる墓、十字架、キリストの殉難、聖三位一体、キリストの生誕死昇天、神の力、審判の日等々その他何でもキリスト教に関するものはすべて悪魔抜いの呪文に唱えて有効である。

呪術を行った際、相手の魔物がなかなか思うままに術者の意に従わぬことも稀ではない。そんな時には二度三度、否時にはそれ以上も呪文を繰り返す。一般には最初から三度繰り返すのが常法となっている。相手の魔がさまざまな異様の恐ろしい姿となって出現してそれに依って術者への抵抗を見せることもある。例えば火の玉になったり、炎の海に浮んで見えたり、騎士の一隊に囲まれた堂々たる王になったり、虎やその他空想的なものの姿になったり、乾草車や辻馬車になって術者をひき倒そうとしたり、馬上の人となって術者を蹄にかけようとしたりするなど。又他方に於ては、呼び出しもしない霊が出現することがある。このように、呼び出した霊は、たとえはっきりと姿を現わさなかった場合でもやはりもと通り追い戻す呪法が必要である。何故かと云うと、目には見えずとも、既に呼び出されている霊や悪魔は、安全な埒を出たものに危害を及ぼさぬとは保証できないからである。この追い戻しの法の最も簡単なのは、呼び出しの呪文を逆に唱えることである。更に又魔の嫌う臭いものを燻べる法もある。どうかす

るとこの追い戻しの呪法はなかなか成功しないことがあって、或る地方の伝説では、依頼された坊さんたちが精進のよくなかったところから、修法がうまく行かず、三日間も円輪の中に閉ちこもらなければならなかった。そこで或る老齢の修道僧に頼んで漸く魔を追い戻すことができたという。又或る伝説では、呼び出された霊が、「誰々坊さんでなければ戻っては行かぬ」と云って指名したともいう。このような修法にも未熟者は成功せぬとされる。一般に魔を呼んだり、復たこれを追い戻したりする呪法は、まかり間違えば術者の生命にもかかわる危険なわざで、少しでも法に外れたり、又たとえ定法通り行った場合でも、その危険がないとは限らず、斧や剣を用意しておくのもそのためである。

呪法を行う場所も亦その成否に関係することが少なくない。場所としては、霊や悪魔の好んで滞留する、幽霊の出そうな物陰しい場所が適当である。特に十字路、中でも墓地へ通ずる路の四ツ角や墓場なども好適である。又時々地下室や、又古い人里離れた物置などもよい。又四方に向って打ち開き、周辺を制することのできる山頂もその適地とされる。

施術の時刻は、多くの場合深夜十二時から一時、又は十一時から十二時の間、或は日の出前、又は日没後である。一週の中では木曜日がよく、月のみち行く頃、又月のかけ行く頃、又満月がよいとも云われる。尚クリスマスの前夜や復活祭がよいとも云われる。

魔を呼び出す目的はいろいろあり得るであろう。単なる好奇心から、又富裕になって隠れた力を得たいとか、又未来や来世や或は未知の事柄を知りたいというのが大部分の動機をなしている。

以上悪魔について大部分の記述を費してしまったが、わが国の鬼は種々の点でこれと共通な要素が多い。「おに」は隠の意味であるというのは通説と思われるが、やはりわが国古来の伝統に中国大陆の考え方や伝教の要

素が添加されている点、Teufel について述べたところと多分に一致する。古来の伝統では鬼は、山男や「大ひと」などと同性格の山中に住む鬼が信じられていた。地名に鬼の付くところも多く、又鬼に馴染んだ里人が酒肴や食物を与えてやった返しに、多くの薪やその他の山の産物を鬼に貰ったといった経験を語る民話も少なくない。こうした各地の鬼に関する遺跡や伝承に依ると、鬼は近世の天狗の所業の大部分と共通の業と力をもっていたことが認められる。鬼が現われて大いに暴れた後に圧伏されるという鬼追い類似の神事芸能は、古くから各地で行われており、鬼が信仰上では山の精霊、荒ぶる神を代表するものの一つの称呼であったことが推測されるなど、いづれもゲルマン神話の神々に対抗する巨人族を想起させるか、その後の童話や伝説の中の悪魔に似通うものがある。鬼という漢字で表現される中国大陆のものは元来死者即ち幽鬼であって、この点でもキリスト教渡来以後の神々がその座を追われ悪魔や魔女に編入されたものに類似する。更に仏教の鬼は地獄の獄卒で、この方面の影響で奈良朝時代には餓鬼、疫鬼が現われ、平安末期から鎌倉時代にかけての説話集には、地獄の赤鬼青鬼牛鬼など、また羅生門の鬼、酒吞童子、茨木童子のような恐ろしいのから「こぶ取り」の鬼のような愛嬌のあるのまで現われた。地獄に関係したり、人畜を取り殺したり、変幻自在だったり、さまざまな魔力を有したり、その反面人間の知恵にしてやられるという間抜けたところもあるなどいろいろな点に於て Teufel と類似すると云える。又これを調伏したり、追いやったり、その害を防いだりするのに、有りがたいお経をあげたり、道德すぐれた高僧に修法を願ったり、さては護符をいただいて肌身につけたり、門に貼ったりして魔除けにするなど全く洋の東西を問わないところである。更に又日常生活に於ての諺や慣用句や物の名称などの類について鬼を使うことも Teufel の場合と同様である。鬼の形相として大体固定しているの

は、人身牛角、鋭い虎牙、裸体、虎の皮の褌、そして殆んど例外なしに、醜悪というのであるが、この点も Teufel の属性と大同小異である。尚鬼の場合もあらゆるものに変身し得ることは Teufel と同じであって、「面は朱の色にて円座の如く広くして目一つ有り、長は九尺許りにて手の指三つ有り、爪は五寸許りにて刀の様なり。色は緑青の色にて目は琥珀の様なり。頭の髪は蓬の如く乱れて見るに心肝迷い怖ろしきこと限りなし。」（今昔物語巻第二十七、第十三）又絶食十余日を経て餓死しその後鬼となったものの形相として「その形身裸にして頭は禿「カプロ」なり。長八尺ばかりにして膚の黒きこと漆を塗れるが如し、目は（カナマリ）を入れたるが如くして口広く開きて劔の如くなる歯生えたり、上下に牙を食ひ出したり。赤き裕衣を搔きて、槌を腰に差したり。」（今昔物語巻二十、第五）というのもあり、又太平記巻二十三には、風にも堪えぬ風情だった女戻が突如として「長八尺許リナル鬼ト成テ、二ノ眼ハ朱ヲ解テ鏡ノ面ニ洒（ソソギ）ケルガ如ク、上下ノ歯クヒ違テ、口脇耳ノ根マデ広ク割（サケ）、眉ハ漆ニテ百入（モモシホ）塗タル如ニシテ額ヲ隠シ、振分髪ノ中ヨリ五寸許ナル犢ノ角、鱗ヲカヅヒテ生出タリ。其重事大磐石ニテ推ガ如シ」ともある。その他宇治拾遺や御伽草紙などにも鬼の記述が見える。鬼の出現する場所は人里をやや離れたところ、或は人の住まぬ古い空家その他のさびしい場所であり、その現わる時刻も黄昏や深夜や或は早朝などとなっていて Teufel の場合と類似することに驚く程である。

注 1. Balaam: 予言者 Beor の子。勝ち誇ったイスラエル人を呪詛するため、モアブの王 Balac に招かれたが、真の天主の天啓に照らされ、天使の威嚇に驚かされて、イスラエル人を呪詛せずに、却ってこれを祝福した。

注 2. 智書: 原文はヘレニズム時代のギリシア語で書かれ、賢王の典

型としてのソロモン王が諸王に語りかける体裁になっていて、現世及び未来の幸福の源泉としての智慧の起原本質活動及びそれが達成されるべき手段を述べ、次に智慧の教師としてのソロモン王の智慧と、イスラエルの歴史に於ける智慧の役割を明らかにし、最後に結尾として、偶像崇拜の愚かさと悪弊について述べた余論を付け加えている。

注 3. der wilde Jäger: 暴風雨の中を、死者の霊の大軍を率いて疾馳するまぼろしの騎者は古いゲルマンの信仰にもあった。この騎者はもと Wodan であった。これがキリスト教に依って変貌して Teufel のいろいろな性格特徴をもった地獄の狩人となり、かくてその率いる軍勢も、もともと刑死者や戦死者だったのが今や教会の解釈で、邪教徒魔女魔術師或は洗礼を受けずに死亡した者共から成るとされるようになった。

注 4. Freischütz: 魔法の助けに依り絶対に外れることのない百発百中の「魔弾」の射手。聖餐用の聖餅か又は十字架像を射撃するか、又 Teufelspakt (悪魔との契約取り交わし) に依っても魔弾の射手となれる。その他俗信ではいろいろのまじないが言われる。

#### 参 考 文 献

- Sammlung Götschen—Germanische Religionsgeschichte und Mythologie;  
 Hermann Schneider: Germanische Altertumskunde;  
 Wörterbuch der deutschen Volkskunde;  
 Wörterbuch des Rotwelschen;  
 Egon Friedel: Kulturgeschichte der Neuzeit;  
 Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens;  
 Der Große Brockhaus;  
 Der Große Herder;  
 Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache;  
 Wasserzieher: Woher; Lexikon der sechs Welt Sprachen;



カトリック大辞典；  
新約聖書，旧約聖書；  
大百科，その他各種百科辞典，国語辞典類；  
柳田国男監修民俗学辞典；  
今昔物語；宇治拾遺物語；太平記

(1961.9)